

「地域雑誌からみた町」 記録

企画趣旨

銀座、上野、浅草など盛り場にはかなり前から、暖簾会や商店街が無料で配る、いわゆる「タウン誌」がありました。一方、この一五年ほどの間に、住民の住民による住民のための自主的地域雑誌が続々と発刊されています。それらは、それぞれの町の歴史を掘り起こして記録し、町の問題をみんなで考えるための広場となり、イベントや町づくりにも積極果敢にかかわっています。

しかし、「町の雑誌」の主宰者たちが一同に集まり、交流する機会はいままでほとんどありませんでした。このフォーラムでは、それぞれの町の特徴、出版の動機と経緯、苦労話、解明されてきた町、コミュニティの変化について、存分に語ってもらいます。そして、各地域雑誌がめざす地域学の方角を参加者とともに、引き出していきたいとも考えています。在野から発信する公開市民フォーラムです。

日 時 一九九九年一月三日(土) 一四：〇〇～一七：〇〇

会 場 北沢タウンホール三階 第三集会室

開催にあたって 陣内 秀信 …… 二

司会者・講師紹介 …… 二

「谷中・根津・千駄木」 森 まゆみ …… 三

「ここは牛込、神楽坂」 立壁 正子 …… 六

「武蔵野から」 野口由紀子 …… 九

「町雑誌 千住」 大野 順子 …… 一二

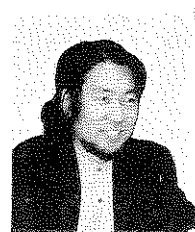
討論 (司会) 森 まゆみ …… 一四

江戸東京フォーラム話題一覧 …… 二五

開催にあたって

法政大学工学部建築学科

陣内 秀信



■フォーラム「地域雑誌からみた町」

江戸東京フォーラムは、学際的に江戸東京を研究して一三年になります。

小木新造先生を中心に、進めてまいりました。昨年、「地域学」を一つの柱に考えてみました。現在、各地域でまちづくり活動が活発です。アカデミックな世界だけでなく、いろいろな立場から地域の調査や研究が活発に行われています。そういう知恵や成果を集めて、地域を考える「地域学」という企画がこのフォーラムです。

東京の代表的な地域雑誌を編集されている、あるいは地域の活動をされている方々にお越しいただきました。これだけのメンバーが、勢揃いされたのは初めてだと伺っております。これも時代を拓り開く局面のように思います。

では、江戸東京フォーラム委員でもある司会の森まゆみさんにバトンタッチします。

■森 まゆみ (もりまゆみ)

「谷中・根津・千駄木」編集者

経歴：東京都文京区生まれ／出版社に入社し／その後フリーに／一九八四年に地域雑誌「谷中・根津・千駄木」を女性ばかり四人のスタッフで発刊

著書：「谷中スケッチブック」／「深夜快読」／「寺暮らし」／「鷗外の坂」／「明治東京畸人伝」／「抱きしめる、東京」など

受賞：「サントリー地域文化賞」／「日本建築学会文化賞」他

■立壁 正子 (たちかべ まさこ)

「ここは牛込、神楽坂」編集者

経歴：東京都新宿区神楽坂生まれ／会社勤務を経て／広告制作会社に勤務／コピーライターに／その後、いくつかの広告制作会社で、家電メーカー、銀行、デパート、通販会社等の新聞、広告、カタログ誌等の制作を担当／そして、フリーとなる／一九九四年に、まちの雑誌「ここは牛込、神楽坂」を創刊

受賞：「第一三回 N T T 全国タウン誌フェスティバル奨励賞(一九九七年)」

■野口由紀子 (のぐちゆきこ)

「武蔵野から」編集者

経歴：石川県金沢市生まれ／一九八一年に、タウン誌「こんにちには小金井」を創刊／一九八七年に、「武蔵野生活文化研究所」を設立代表／「こんにちには小金井」を「武蔵野から」に改題／それを機に、エリアを多摩と武蔵野全域に拡大／一九九六年、東京都景観条例検討委員会 委員

著書：「檜原村一九九三―里に吹く風」

■大野 順子 (おおのじゅんこ)

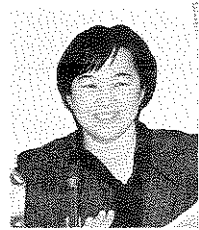
「町雑誌 千住」編集者

経歴：東京都足立区千住生まれ／クリエーター、イラストレーターとして、大野デザイン室に勤務／一九九七年に舟橋左斗子とともに、まちづくりを考える会「千住・町・元気・探検隊」を結成／「千住・町・元気・探検隊」は地域雑誌「町雑誌 千住」を発行／千住のまちの調査と地域の P R 活動

受賞：「第一三回 N T T 全国タウン誌フェスティバル地域コミュニケーション賞(一九九七年)」

『谷中・根津・千駄木』

森 まゆみ



■タウン誌と地域雑誌

フォーラムを始めます。

まずは、地域雑誌の流れをお話します。戦前には、町の名前がついた雑誌、『浅草街』や『銀座』が出ていますし、町内会の名簿、町に関する歴史、情報、案内のようなものも結構あります。

戦後は、『銀座百点』や『上野』が有名ですが、盛り場では、暖簾会とか商店街がバックについているタウン誌といわれるものが出されます。町にお客さんを引き込み、ステータスを上げるために、著名な文化人の連載や対談とともに、店の紹介があるものです。全国的にたくさん出ていますが、情報誌という性格が強く、店のレジのところにあつて無料で配るのが一般的です。

東京経済大学の田村紀雄さんが「タウン誌」という言葉を最初に使われたと聞いています。一九六八から七〇年、地域住民闘争や反公害運動などのなかで、地域の問題

を住民の立場で考えようと雑誌が自主的に発行されます。巨大ニュータウンでも、地域でより豊かな生活をするための雑誌がでます。これらは従来の無料で配るタウン誌と、かなり性格が違ってきます。

マガジンハウスの『Hanako』が、「日本で初めての本格的な地域雑誌」とネーミングをしました。『Hanako』は毎回違う地域を取り上げて、地域を定点観測的に見ていないので、地域雑誌ではないと私は思っています。

NTTが一五年ぐらい前に、NTT全国タウン誌フェスティバルを始め、去年で終わってしまいました。が、全国からタウン誌に応募してもらって表彰をしていました。今日の四つの地域雑誌も賞を取っています。毎回の応募数は六〇〇ぐらいで、全国のタウン誌の情報が載っている年鑑のようなものも出していました。

最近では、タウン誌というよりは、むしろ地域雑誌、地域における自主的なメディアといったほうがいいものが、東京でも結構出ています。今日は、三人の、まさにそういう地域雑誌主宰者に来ていただいて、役割とか、発刊のきっかけとか、ご苦労とか、喜びとか、地域との関係とか、を話していただこうと思っています。

その前座として私たちの『谷中・根津・千駄木』、通称『谷根千』を紹介します。

■谷中・根津・千駄木地域

私たちは、「谷中」「根津」「千駄木」という三地名を並べた地域雑誌『谷中・根津・千駄木』を一九八四年から出しています。町は文京区と台東区の区境です。文京区も台東区も、昭和三〇年代には、人口が二六〇二七万人でしたが、今は一六万人ぐらいです。地価が高くなって、親と子ども世帯がつぎつぎ出て行って、高齢化と過疎化が進んでいます。過疎化ではなく、これが適正規模かもしれません。

町は震災と戦災で焼けることが少なく、震災前の建物もかなり残っています。位牌、文書、絵草子、物語なども残っています。江戸からのいろいろな足跡も残っています。地域を写真で紹介します。

写真1 根津神社です。

写真2 当初は修学旅行用の旅館だったのを、外国人向けの宿にして繁盛しています。

写真3 小さなパン屋さんで、明治の建物です。樹木も残っています。この地域は、由緒あるお寺が一〇〇ぐらいあり、谷中墓地もあります。路地が残っていて、皆が大事に使っている公共スペースもあります。

写真4 二〇〇年前の寺の土塀です。

写真5 震災直後にできた出し桁造りの酒屋さんです。全部壊してマンションになるところを、蔵だけ壊して、ファサードは保存することができたのです。

写真6 プリキ屋さんや銅壺屋さんがあります。職人の手仕事や町工場などが多い所です。『谷根千』では、いろいろな生業、お米屋さん、お煎餅屋さん、お寿司屋さん、酒屋さん、和菓子屋さんなどの特集をしています。どんなことに喜び悩みながら、そこで生きてきたのかという特集、あるいは私たちの町に住んでいた夏目漱石、森鷗外、樋口一葉、石井柏亭の特集もしています。

また、ランドマークといえますが、皆が知っていて大事に思っているもの、例えば、なくなってしまう藍染川や谷中の五重塔、そういうものも調べて載せました。

雑誌を読んで、人が見学にやってくるようになり、町の人たちは、古ぼけた近代化に遅れた町だと思っていたようなのですが、大切なものに気づいて、いろいろな活動が生まれました。建築家や都市デザインの方たちが、「谷中学校」というのをつくって、建替の相談や保全、道をもっと楽しくする計画をしています。

写真7 谷中小学校は、町並みに合った和風に建替えられました。見学者が多いので、入口の前に休める場所をつくって、そこに大名時計を置いています。

写真8 廃業するお風呂屋さんの建物を借りて現代美術のギャラリーにしたものです。

写真9 路地のなかの小さな景色です。

写真10 地下水、湧水があつて、金魚やホ

テイアオイを育てています。

上野の不忍池は、海の遺構です。私たちは不忍池の地下駐車場建設反対運動や建物の保存運動にもかかわっています。

写真11 一〇〇坪、二〇〇坪の家が相続で手離されると、土地の真ん中に路地をつけて、ミニ開発の建売住宅が建設されました。

写真12 町の古い方のところへ行つて、伝承や昔のことを聞いて地図に落とし込んでいきます。

写真13 保存した民家です。下町風俗史料館の付設展示場として、公開されています。

写真14 東京駅です。壊すというので、私たちも保存運動にかかわっています。

写真15 年に二度、NO₂の測定を皆でやっています。細かいメッシュで、自分たちの吸っている空気の調査をしています。

写真16 井戸水の調査です。井戸が多いので、水質を簡単に住民が調べられるキットを考えてもらつて、子どもたちといっしょに調査をしています。

写真17 このような立派な民家は、大体マンションになってしまします。最近、文化財指定ではなくて、地域のもので大事に残そうという登録文化財制度ができました。これはその働きかけをしている建物です。

写真18 奏楽堂は明治二三年にできた日本最古のコンサートホールです。壊されるか移築されるかでしたが、保存運動が実つて

残っています。私たちは、日本最古のオルガンを保存する手伝いをしました。これで、私の地域と活動の紹介を終わります。あとは三人の方に存分にお話いただきましょう。



写真3

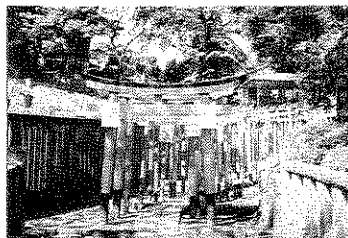


写真1

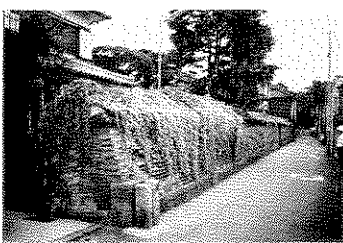


写真4



写真2



写真15

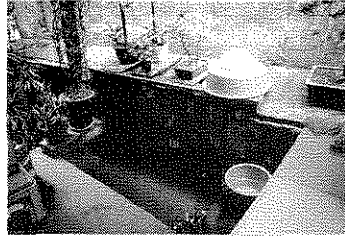


写真10



写真5

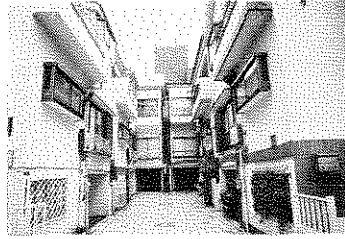


写真11



写真6



写真16

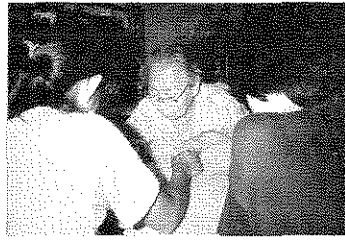


写真12

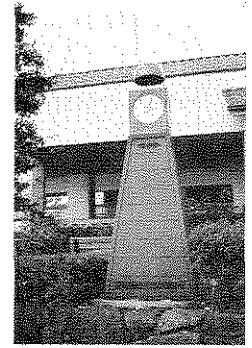


写真7



写真17

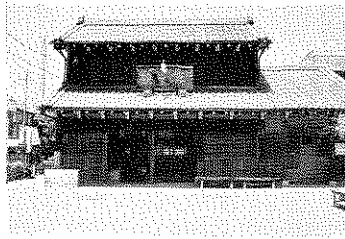


写真13



写真8

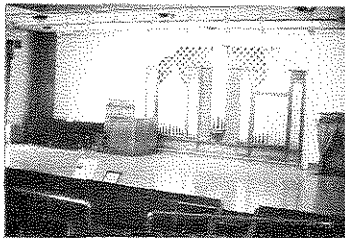


写真18

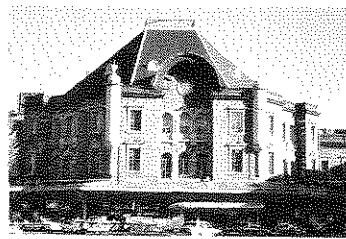


写真14

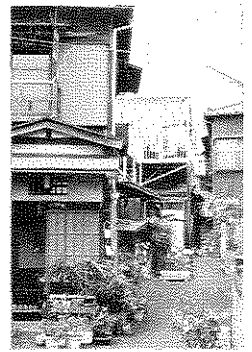


写真9

『ここは牛込、神楽坂』

立壁 正子



私は明治以降に繁栄した神楽坂より、江戸の町人文化的なものに関心を持っていましたが、森さんたちの『谷根千』に憧れ、パブルがはじけた頃、無謀にも勤めをやめて、地域誌を始めました。こうして「ああ、自分のまちがある」と気付いてからは、発見の連続でした。例えば、神楽坂を新しい目で見たとき、こんな要素が浮かび上がってきたのでご紹介してみましよう。

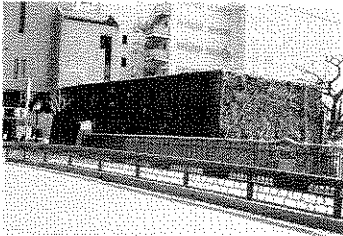


写真1



写真2



写真3



写真4



写真5

写真1 江戸三十六見附の一つ、牛込見附御門の石垣で、JR飯田橋駅西口の左手にあります。この先が江戸城に通じていて、反対側が神楽坂下です。明治生まれの方の話では、昔は御門に木戸もあって、向こうへ行くときは「見附うちまで」という言い方をしていたそうです。

写真2 神楽坂の冬景色です。坂下から地下鉄東西線の神楽坂駅まで約七〇〇メートルが商店街です。戦災に遭ったのでいまある建物は全部戦後のものです。

写真3 神楽坂は老舗が多く、これは一三〇年続いているうなぎの店です。

写真4 別名ミスター神楽坂。まちの生き字引のような履物の老舗の大旦那で、洋服は一着も持っていないという方です。

写真5 毘沙門天善国寺です。麹町の善国寺谷からここに移ってきた際、門前の葦簀

張りの植木屋が一緒にきたのが神楽坂のお縁日の始まりといわれています。明治の半ば頃から昭和初期にかけては、夕方になると車を通行止めにして、通りの両側に連日夜店が並び……つまり歩行者天国や夜店はしりり、毎晩大変な人出だったとか。花柳界をひかえていたので芸者さんとすれ違ふこともあり、男性は鬢付け油の匂いに胸をときめかしたとか。文士や文化人も多く「今日は誰それを見かけた」というのが話題になったそうです。

写真6 ここは牛込という地名のもとになった牛込氏の居城跡で区の史蹟になっています。このお寺は光照寺といい、江戸時代、神田からこの跡地に移ってきました。仏像や石碑などの文化財のほか、一面には出羽松山藩主酒井家の五〇にも及ぶ巨大な墓石群もあり、隠れた名所となっています。



写真10

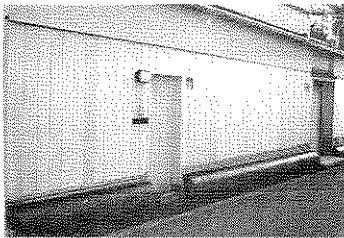


写真11



写真12



写真6

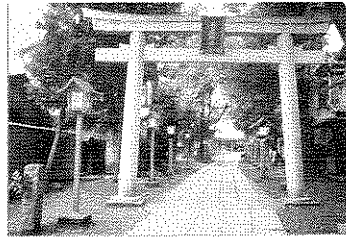


写真7

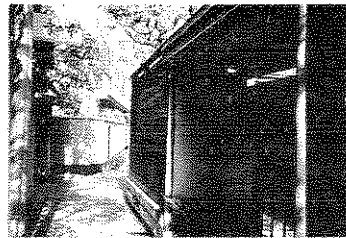


写真8

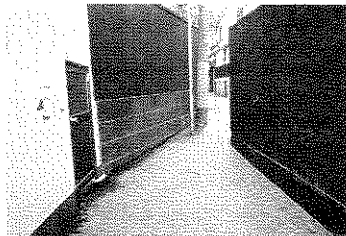


写真9

写真7 中世の頃、群馬の大胡からきた大胡氏こと後の牛込氏ゆかりの赤城神社で、ここは氏子が多く、秋祭りには境内に露天が並びお神輿もたくさん出て賑わいます。
 写真8 神楽坂のおもしろさは、表通りから一歩入ったところに別世界があることです。例えば、毘沙門様の石畳の横丁の奥には、こんな料亭街がひかえています。右側

は、よく作家たちがこもって仕事をしている旅館で、山田洋次監督は、寅さんの脚本をここで書いていたのだとか。
 写真9 迷路めいたこんな路もあります。
 写真10 このまちにいた泉鏡花がひいきにしていた肴屋の徳さんが始めた料亭で、いまは六代目の人がやっています。
 写真11 これは黒塀とは対照的な木肌を活

かした洗い出しの塀ですが、その後、壊され、マンションになりました。料亭街にもビル化の波が押し寄せています。
 写真12 お正月、日本髪姿の芸者さんを見かけました。いま神楽坂には五〇数名の芸者さんがいて、料亭も一三軒あります。
 写真13 花柳界関係の新年会の日、急に雪が降ってきて、帰りがけ、若い芸者さんのこんな一瞬をカメラにとらえました。着物を汚さないために、なんのてらいもなくパツとやった小気味よさ。そこで一句。
 「潔く裾をからげて雪の坂」
 写真14 前にお見せした、毘沙門天前の石畳の横丁で、和と洋の対照がおもしろいところです。右手は、大きい声を出すとお静かにと注意される、古風で静かな酒の店。その向かいは、フランス人がやっているそば粉のクレープの店です。
 写真15 横丁にはこんなイタリア料理の店をはじめ、トルコ料理、モロッコ料理などエスニック系の店も増えてきました。こういう店は日本的なまちにも結構とけこんで、繁盛しているようです。
 写真16 神楽坂に平行する軽子坂です。坂の片側一帯はオフィスゾーンになりましたが、反対側の一面は、料亭や高級割烹、お座敷天麩羅の店が点在するところで、ここでも新旧がおもしろい対比を見せています。
 写真17 この夏に、「まちに飛びだした美

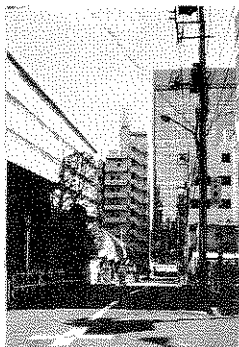


写真16



写真13



写真17



写真14



写真18



写真15

術館」という催しをやった際、地元のフォト関係の会社がボスターをもとにTシャツをつくってプレゼントしてくれました。
 写真18 これはそのイベントで、私たち牛込倶楽部と地元のアユミギャラリーが主催、二つの商店会の後援で行いました。
 七〇〇メートルに及ぶ坂道一面にロールペーパーを敷き詰め、みんなで絵を描いたのですが、このペーパーは、地元の紙を断裁する会社が、無料で提供してくれました。

紙の敷き詰めは、ロールペーパーの芯に金属パイプを通して二人で両側を持ち、紙を繰り出し、別の人たちが次々ガムテープで固定し、画材や筆洗いバケツを配置しました。このときはアユミギャラリーでやっている建築塾の塾生さんも協力してくれました。この写真は大橋富夫さんという写真家が撮ってくれたものです。
 描く時間は一時間としましたが、一二〇〇人もの人に参加してくれました。すごかつ

たのは子どもたちで、顔や手にも絵の具を塗ったりして大喜び。見ていた人たちも絵筆やカラーマジックを渡すと、すぐ描き始めて、皆さん口々におもしろかったと言ってくれました。準備期間は短かったのですが、みんなが力を合わせればこんなこともできるのかと震える思いでした。絵は、ほしい人には分け、あとはやむなく処分しましたが、絵を観賞する時間をもうければよかったなどの反省もあります。

『武蔵野から』

野口由紀子



私は、小さな町単位の地域雑誌『こんにちは小金井』を五年間やって、六年目にエリアを広げ、『武蔵野から』と改題しました。地域は、吉祥寺から立川、昭島辺りで、大体、中央線を真ん中に、西武線と京王線府中・調布、北の小平など一〜三市が対象です。

私は、都心から小金井に、新住民として引っ越してきました。家庭をつくり、子育てを始めましたが、あまりにも町を知らな

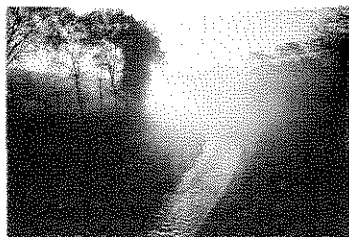


写真1



写真2



写真3



写真4



写真5

い。血縁、地縁、社縁のないところで、一体この町はどんなだろうと思つたことが雑誌づくりのきっかけです。興味のままにつくつてきて、気がつけば一八年、というわけです。

小金井在住の林望さんが、『東京人』に「小金井のトホホ」というのを書いてくれました。「トホホ」の町ですが、そのうち「ウフフ」となるところがいっぱいあります。そのことが、雑誌づくりの励みになります。

写真をお見せしますので、地域をイメージしてください。

写真1 野川の夜明けです。野川一帯は地形上、国分寺崖線と名付けられ、崖線部はハケと呼ばれ、東京都が保存しています。もう一〇数年、私はこのあたりに住んでいます。

写真2 寒い冬の朝、温度差で朝霧が立ち

ます。川は西から東へ、そして南に流れて多摩川に注いでいます。

写真3 公園の中を流れる野川です。ここは元ICUのゴルフ場で、その前は中島飛行場でした。森の奥に地下水が湧き、きれいな流れをつくっているのです。『武蔵野から』という名前は、こういう美しい風景があちこちにあったからです。

写真4 湧水ひろばの秋の風景です。

写真5 野川の春です。世田谷で、子どもたちの遊び場の会をやっている友人が、「世田谷では、一つの家の保存運動に四苦八苦しているというのに、ここはすごいスペース！」と感心していました。

写真6 やはり、空が広いという感じですが、今日の出席者四人のなかで、私だけが地方出身者です。上京して、四谷に住んでいたのですが、土のある暮らしを求めて、小金井に落ち着きました。



写真6

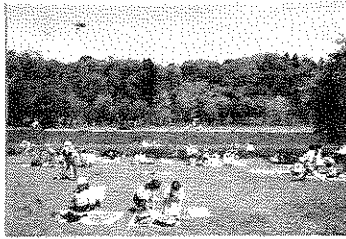


写真7



写真8

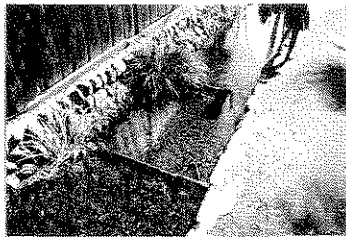


写真9



写真10

写真7 野川公園の芝生の丘です。遠足や写生会があります。「武蔵野から」の創刊時に、エリア各地の公園でアンケートを取りました。意外だったのは、国木田独歩の『武蔵野』を知らない人がほとんどでした。武蔵野は、武蔵野市の名前だと思っている方が多く、『武蔵野から』は、「それは武蔵野市の雑誌ですか」と聞かれました。

写真8 この写真は練馬区石神井の三宝寺池です。杉並の善福寺池、そして井の頭池が武蔵野三大湧水池です。

写真9 国分寺の崖線下の眞姿の池に続くお鷹の道です。多摩の台地の湧水を集めて流れる小さな川が至るところにあります。独歩の『武蔵野』に、「武蔵野を歩くのに道に迷うのを怖れてはいけない」というのがありますが、まさに、どつちに歩いても次々に発見があります。

創刊号の「紙ヒョーキ」欄に、森さんから小さなメッセージをいただきました。「かつて千駄木も林町も武蔵野でした。少しでも残った大木を眺めながら、はるかなところに思いを馳せています」と書いてくださいました。その武蔵野のイメージである雑木林は後退気味です。また、『武蔵野から』のキャッチコピーに、「ギャロツブ東京三分の一」というのがあります。東京の人口の三分の一は武蔵野、多摩地区にあつて、面積は半分、東京へ行くのと多摩まで行くのとがほぼ同じ距離、電車賃も同じぐらいなのです。

写真10 JR国立駅です。武蔵野地域の真ん中を、JR中央線が走っていて、吉祥寺から立川まで高架になる予定です。この高架を何とか武蔵野らしいものにしたいと、「グリーンネックレス構想」を打ち立て、

「まちづくり大研究」を始めました。「武蔵野から」の一一、一二月号で誌上シンポジウムをしています。

写真11 このモノレールは四両編成で、武蔵野、多摩地区を南北に走っています。町との違和感はありません。JR中央線は一〇両編成で、電車がラッシュ時には二分一本走ります。

写真12 モノレールの工事中の高架橋です。「多摩は何がいちばんきれいですか」と聞かれると、「夕日」というふうに皆さんおっしゃいます。

写真13 写真はスペインの古い町ですが、ローマ時代の水道橋や、中国では万里の長城が文化遺産として残されています。フランスではシャモニーモンブラン駅がほととできるたたずまいをしていますし、デンマークの、アンデルセンの生地、オデンセ駅



写真11



写真12

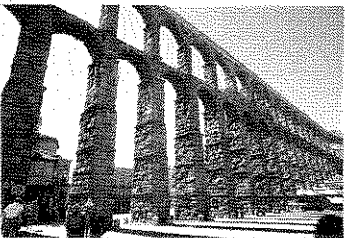


写真13

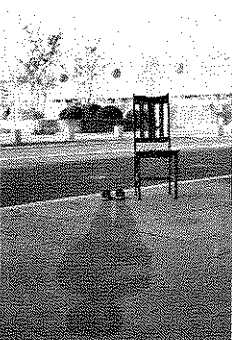


写真16

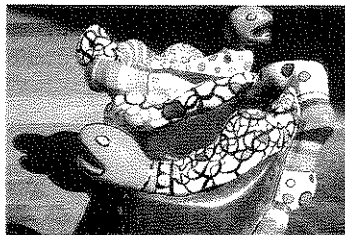


写真15

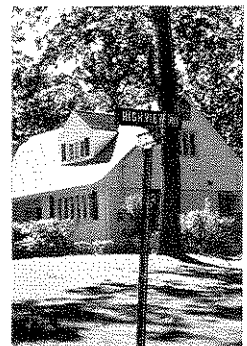


写真14

の前は広い緑の公園です。
 「グリーンネットワークス構想」で、いろんな方に話をうかがっています。「ローマの時代には、構造物は観光資源だった」と聞きました。でもいまは、構造物という反対運動が起きたりします。これはどういうことだろうか？って考えています。

写真14 ニューヨーク郊外の住宅地は、ほとんど塀はないそうです。「グリーンネットワークス構想」を思いついたのは、ガードニングとも関係します。ブロックの塀を生け垣に、といったことも含めてです。町をウオッチングしたときに、塀が汚いという印象があったのです。美しい風景が周りにあるのに、家並みはきれいとは言えない。

写真15 これはベンチで、立川駅北側の再開発された街区「ファールレ立川」にあります。町にアートをというコンセプトでつく

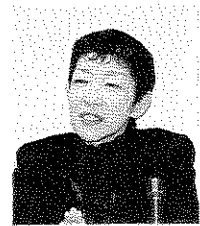
られました。国内外のアーティストたちの作品が集まっています。

写真16 これもその一つで、ユーモアがあつて、だまし絵みたいで、「おや？」と思います。これらをプロデュースされた北川フラムさんは、いま、新潟で「アートネットワークス構想」をやっておられます。「グリーンネットワークス構想」は、そこから名前を拝借したのです。「グリーンネットワークス」というのは、アメリカのポストンにもあるんだよ」という情報もいただきました。それも地域の景観を大事にする市民の運動が発展し、定着していったそうです。

以上が『武蔵野から』のバックボーンになっているところなんです。写真、イラスト、さまざまな情報はいつも周辺からいただいています。地域のそういう職能のある方に支えられて、一日一歩、やっています。

『町雑誌 千住』

大野 順子



私たちの場合は、特に千住のソフト面を
ご紹介したいのです。

千住は、小さなエリアの小さな町です。
いまはなくなってしまうらしいもの、な
くなってしまったなどということも知らな
いので、どこにもあるものと思っていたも
の、何かほのぼのとした千住独特の温かさ
を、三分ほどのアニメーションにしてあり
ますので、見ていただきたいと思えます。
このビデオにはタイトルはありませんが、
強いてつけると「路地」だと、これをつく
った芸大生の大倉いずほさんが言っていま
す。こういった何かしみじみ、ほのぼのし
たものが町フェチの人にはたまらない魅力
なのだそうです。

千住には五〇棟以上の蔵が残っていて、
「蔵の町」と言われていますが、強いて言
えば蔵のある町とか、隠れた蔵の町という
感じですか。ごくごく普通の町で、江戸期か
ら昭和にかけての古い蔵を、壊さずに活用

しているのです。

グループの名前は、「千住・町・元氣・
探検隊」と言います。『町雑誌 千住』の
発行のほかに、「蔵研究会」という活動も
しています。

今年の一〇月から十一月末にかけて、
「千住なぞなぞ蔵めぐり」という蔵を探検
するウォークラリーイベントをやりました。
そのなかで、芸大の学生さんたちが「路上
アート展結」を開いてくれました。お手元
にお配りしたパンフレットにある路地の写
真は、ダンボールでつくったピンホールカ
メラで撮ったものです。若い人たちの見た
千住というのが、実に新鮮な感じで、うれ
しいと同時に、こういう見え方もあったの
かと、勉強になりました。

千住は、東京二三区の右上、足立区にあ
ります。足立区は扇形をしているのですが、
千住はちょうどその要の部分にあたります。
江戸時代は「武州千住宿」と言われていま
して、江戸への入口として随分賑やかだっ
たようです。千住を越えますと、すつかり
農村地帯になってしまいます。足立区と言
えば千住と、最近まで言われてきた地域で
す。

ちょうど隅田川と荒川にすつぼりと囲ま
れていて、島です。私が子どもころは、
「島国、島国」と言われていましたし、そ
う思っていました。確かに島国的性格と特

徴を持っています。どこへ行くにも川を渡
って、橋を渡って行かなければならない地
域だったのです。ですから、時計の回り方
が世の中とちよつと違っていて、のんびり
していました。それこそ一五年前は「遅れ
た町」とか言われていたのが、結果的に今、
大変いい町というふうに評価されて、やっ
と時代が追いついてきたという感じなので
す。

この雑誌を始めたきっかけは、全く突然
で慌ただしかったのです。何年か前に大阪
から千住に舟橋左斗子さんが引越してき
ました。彼女は、お豆腐屋さんがある、屋
台を引いているおじさんがいる、そういう
ことが大変気に入って、しかも、それらが
失われつつあることを知って、地元のまち
づくりに参加したいが、どういう方法があ
るだろうかと相談を受けたのです。古い
町ですから、新しく入ってきた人が町づく
りに参加するのは、それはそれは大変なこ
とです。それで、私が「例えば、地域雑誌
をつくるどうか、そういったこともいいんじ
やないの」と話しましたら、ある日、突然
それが「地域雑誌を始めることになりました
た」になってしまったのです。

私には地域雑誌の知識はありませんでし
た。とてもおもしろい町だということ、か
つて地域雑誌がいくつか出たのですが、二
号、三号で消えてしまう。その繰り返しを

見ていましたから、やるのは大変、続けるのも大変、やるのだったら続けなくては意味がないと随分言いました。始めるにあたって、メンバーの中に地元民がいないので、結局、唯一の地元民ということで私が参加しました。そして深入りしてしまいました。

季刊のつもりで出し始めたのですが、全員がボランティアというネックもあって、四年で八号しか出ていません。次号の準備はほとんどできてはいるのですが、なかなか前に進んでおりません。

今までは一冊二〇〇円、これは買いやすい値段です。本を読まない人に気楽に読んでもらいたいという目的がありました。ですから、普段本屋さんに行かない人でも手にとれるように商店にも置いていただく形をとりました。

しかし、二〇〇円という値段が逆にネットクになつて、地元以外の本屋さんでは置いてもらえないのです。本として認めてもらえないのです。次号からは、ページ数を増やして三〇〇円にして、本屋さんにも置いてもらつて、広く地域以外の方にも読んでもらおう思っています。

『町雑誌 千住』では、いろいろな特集を組んで町を紹介していますが、町の温かさと、それを持続させることをPRしていきたいと思っています。



地域雑誌の比較

地域雑誌名	谷中・根津・千駄木	ここは牛込、神楽坂	武蔵野から	町雑誌 千住
創刊	1984年	1994年	1981年	1996年
発行回数	季刊	不定期刊行	隔月刊行	不定期刊行
値段	400円	400円	100円	200～300円
発行部数	10,000部	5,000部	45,000部	5,000部
版型頁	A5判・48～56頁	A5判・72頁	B5判変形・36頁	A5判・21～45頁
印刷	1色オフセット	表紙カラー	カラー	2色
スタッフ数	3人	2人	5人	2人
組織形態	有限会社	個人経営	NPO	ボランティア



その秘訣をまずはお伺いしてみます。

○野口 多分、続けなければいけないと思わなかったからです。スタッフも含めて、移動性の高い町で、一八年で、一〇七号ということに私もびっくりしています。

○立壁 すごいですね。こちらはもう疲れて、ピークを過ぎたという感じですよ。

○大野 疲れたと言えば、私たちも疲れきっています。続けるための工夫が、一切されていきいまま、立ち上ってしまったものですか。

■編集という作業

○森 どうやって編集して形にするかについて教えてください。

○野口 私は昭和二三年生まれで、そのころ女性が仕事をするというのはまだ珍しかった時代でした。私ともう一人、根本裕子が最初からかわっているのですが、雑誌づくりは初めてだったのです。そういう意味ではプロではありませんが、周りに教えてくださる方、アドバイスしてくださる方が大勢います、助けられてやりました。

○立壁 私はコピーライターですが編集の

経験はありませんでした。ただ、コンセプトを立てたりいいところを探すことには慣れていたかなと思います。で、雑誌は毎回特集を組み、あとは連載ものや決まったコラムや読者の投稿欄などを設けています。

編集は最初からコンピューターのDTPにチャレンジしました。創刊号は知人の指導を受けながらつくり、その後は相棒の女性がんばっていい仕事をしてれています。ただ、コンピュータートラブルも多くこの夏はウイルスにやられて大変でした。

○大野 私も編集は素人で、それが結果的によかったと思っていますが。同じく二三年生まれで、そのころは女性のデザイナーはほとんどいなくて、女性や子ども、あらゆるジャンルの企画とかデザインとかを手がけていました。その延長で、ブックデザインや、文章を書いたり、近いことではありますが、雑誌、まして版下制作までとなると、やはり非常に苦勞をします。

○野口 何かしたいとき、お金を払って習い事をします。例えば、カルチャーセンターや資格を得るために学校に行くとか。でも、私たちは町を使って学習しているという意識が高い。『武蔵野から』の編集に携わって、その後、もっとプロフェッショナルな世界に入った人は大勢います。

■長く続ける秘訣

○森 これで大体四つの町の特性がお分かりになったと思います。地域は違いこそすれ、問題、苦勞、喜びなど、共通点と違う点が、いくつか浮き彫りになってきました。各地域雑誌の特徴を表にして一三ページに載せてあります。それを見ますと、『武蔵野から』がいちばん長く続いています。

■なぜ地域雑誌には女性が多いのか
○森 ここで、世代、就職、女性という問題が出てきました。なぜ女性が地域雑誌をやるのでしょうか。

○野口 それは、男の人がかかわるには、リスクが多すぎるのではないのでしょうか。地域雑誌はそう簡単にはなりません。難しいです。自転車操業です。お金はかなり集めてますが、その分はほとんど印刷と製作費に出ていきます。生業とするために働いているのではなくて、雑誌づくりのために集まっているところがありません。

○大野 それはあるかもしれないのですが、女は粘る、こだわりというのがあります。そういう意味で、向いているのではないかと思えます。

それに、通常、女性は語る場が少ない。男は天下国家を論じるけれども、女はもっと身近なところで、実はすごい重要な問題があるのだというのを、身をもって知っている。だから、本当に訴えたいという気持が強いと思うのです。それが原動力になっているのではないのでしょうか。

○立壁 私たちのところには、たまたまフリーで、執筆や撮影をはじめコンピューターにも強い男性の助っ人が二人います。

○森 男性の協力者が多いという点では、私たちのところも同じです。

いわゆるタウン誌と言われるものには、男性の経営者も多いのです。出版社を辞めてタウン誌を始める方、例えば、月刊『日本橋』の上林さんは、確か河出書房にいた方です。

ただ、男性の場合、タウン誌を拡大したり、チェーン化しようとすることが多い。そうすると、この町が好きだから、この町でもっとより楽しく住んでいきたいから、地域雑誌をつくるという、私たちのスタンスなどとはかなり違ってきます。

一つのお店から、暖簾会などで五万円ずつの会費を二〇〇店集めれば、それだけで月の上がりが一〇〇万円です。十分、経営として成り立ちますが、私たちの場合そうはいかないというところがミソというか、悲しいというか。

■仲間づくり

○森 仲間づくりについてお話ください。

○立壁 レイアウトと表紙をやっている女性が忙しくなって、いま専従は一人ですが、近くにかつての仕事仲間がいて、いろんなかたちで参加、協力してくれます。みんな神楽坂が好きで、仲間には恵まれています。ただ、プロで忙しい人たちなので、あまり

拘束せず、楽しみながら自由に参加してもらえようと思っています。

○野口 専従は三人、手伝う人が三人です。あとは助っ人です。

多摩には大学が多いので、学生が実習で毎夏やってきます。昨年は二人でした。自分たちの興味がそのまま形になりますから、楽しくなるようです。

○森 『谷根千』は、三人が一応専従スタッフですが、この何年かは、私がほかの仕事が忙しくなって怠けているので、二人が専従という感じでした。

○大野 私たちのところは、何となく集まった人たちという感じですが。メンバーの多くは、雑誌部門以外の蔵探検とか町歩きとかを主な活動にしています。出入り自由という、フアジーなところがよいと集まってくる。スタッフのほとんどは、千住以外の人たちで、その辺がちよっとネットクでもありますがおもしろいと思っています。

■組織形態・経営

○森 私たちは有会社という形にしています。やはり一万余部になると、印刷屋さんにもきちんと仕事してもらわないといけない、銀行との付き合いもありますから。当

時は、NPOという考え方が定着していなかったため、きちんと取り組みを継続させていくために有限会社にしたのです。

好きで始めたので、夫の稼ぎをつぎ込むわけにはいかなかった。皿洗いや校正のアルバイトもしました。報酬が払えるように努力をしました。そうでないと、男性がいつまでも参入できない分野になりますから。スタッフの労働報酬はどうされていますか。

○野口 何とか二桁のお金が出せるといいのですが、二桁前で落ち着いています。初期のスタッフに元銀行OLがいて、週一〜二日出てきて帳簿をやってくれていました。

みんなの気持は、仕事が生活の中心になるのは困る。例えば、収入を増やすために時間を取られて、家庭や子どもに一定以上の犠牲を強いられるわけにはいかない、と。

○立壁 スタッフには、友達価格ですが雑誌発行後に渡すようにしています。あと、連載をお願いしている方にも、その都度、わずかながらお支払いしています。ただやりくりがたいへんで、会社をやっている方にお礼として広告を出させていたたいり、雑誌をたくさんほしい方には現物支給という場合もあります。

○大野 現在は全くのボランティアだけでは、無理になつてきているように思いますが、ですが、本の会社をつくらうとすると、まず、利益を追及します。ペイできないようなら、まったく違う片仮名のタウン誌的なものにせざるを得ません。私たちは結果的にそのようにならなくてよかったですと思っています。

舟橋左斗子さんの自宅が雑誌の編集室を名乗り、私の自宅が発行元ということにして、メールやファックスが行き交います。事務所を持つていません。人には、「SOHOです、流行に敏感なのです」とか言っているのですが。

一冊出すと、読者やマスコミから、それに対するいろいろな問い合わせがきて、その対応だけでも大変です。とにかく専任のスタッフがいないと成り立たないのではないかと。生半可に興味でやっている、道楽でやっているというわけにはいきませんし、ライターもカメラマンも、イラストレーターも、多くの人たちがこの地域がおもしろいということに参加してくれてはいますが、その辺もきちんとしなければいけないと思つています。ですから、課題は山積みです。経営の現状は、雑誌の売上げと会員収入で、やっと印刷代、フィルム代、紙焼き代の実費だけを賄っています。内部での交通費、通信費、備品などは自

己負担になります。長く続けるには、いま、何とかしなくては、と考えているのですが。

○野口 私たちは経営的なことをほとんど考えずにやっていっているのを不思議に思っています。最初は我が家の食卓が編集テーブルでした。いまでは、大きなお金が動いてはいるのですが、右から左です。手元に残る場合もホントに小さい。その小ささと気持の大きさを合わせるとNPOとなるんですね。法人化を考えている最中です。税務署から「事業形態」について問い合わせがあったり、訪ねて来られることも数回ありました。こと細かく説明するので、首をかしげていらつしやいました。



■雑誌と地域運動

○森 町の個性も、置かれた状況も、成り立ちの経緯も違うから、それぞれの在り方があっていいと思うのですが、例えば、活動が先にあつて、それから雑誌が出ていくというのがあります。活動の部分と雑誌の部分はどう区切るかは難しい問題ですよね。

○大野 そうですね。雑誌をつくる以外に、イベントなどでも多くの時間を費やします。自分の仕事も、最小限しなくてはならない。結局、徹夜続きで二四時間パソコンの前に向かっているようなところがあります。

○森 私たちは、雑誌部門と市民活動に一応分けています。事務所は活動の会合に使われますし、会合には、私たちも参加しています。雑誌は雑誌でやるというスタイルです。

■企画の元はどこから

○森 片っ端から見ると、調べるといふのは、地域雑誌の一つの方法だと思います。つまり、近代的な知というか、体系的に考えて、抽象化し分類していくというのではなくて、地面の上を片っ端から調べていく。そういうことができるのは、地域雑誌ならではないと思うのですが、企画はどうやってつくられますか。どんな企画が人気がありましたか。

○野口 ネタだけは困らないですね。

東京には地酒が結構あつて、その蔵元の一三か一四は全部多摩にあるのです。それで、「もう飲まずにいられない／多摩ほろ酔紀行」という、意外でおもしろい特集を出しました。

また、「開けゴマ、アウトドア」とか、「それ行け温泉」の特集では、温泉や銭湯へ片っ端から入りました。銭湯はだんだん少なくなっているのですが。いま、私たちの間で、いちばんホットなニュースは、深大寺に温泉が湧いたことです。野川のハケ沿いにある料理屋さんの内風呂で、朝湯を五〇〇円で開放しています。

多摩や武蔵野の畑でできる東京産の野菜を集めようと、何日も、あちこちと出かけたこともありました。そんなとき、大豆をおみやげにいただいたりするので。

○森 私たちもお米やお菓子、自分の庭で柿が、葡萄がなつたと持つて来てくださいます。何かお布施で生きているという感じがします。

○大野 餅菓子特集をやったときに、取材に回ったスタッフは、体重が五キログラムも増えたと言っていました。

○立壁 私たちもご執筆いただいた方や読

者から柿やりんごなどをいただきます。

企画に関しては、地域誌を始める前、商店会の人から「我々も新聞のようなものを出していたけれど、ネタはあまりないですよ」と言われました。でもちよつと調べて一〇年分のネタはあるなど感じました。事実、企画には困りませんし、何かのテーマで始めると予定していた何倍ものことがわかってくる。この春は、読売新聞から日本画の楠木清方の展覧会をするという案内をもらい、清方はこの界限にいた人なので、企画を急遽変更したとたんに、ある店のご兄弟が清方の名画のモデルのお孫さんだという情報が入ってきたんです。ですから何か特集をやるときは事前に「こういうことをやります」と、周りの人に言うようにしています。ただ、人気というかよく売れるのは、やはりランチガイドなど食べ物情報ですね。あと「粹すじ事情」という花柳界の特集も人気がありました。これは女性の企画じゃないだろうと書かれたりして。

○森 私たちも、あそここにこういう人がいるよとか、何でこの企画をやらぬのかとか、町からもらう情報が多いので、企画には困りません。

雑誌は双方向性ですから、一方的に思いつけてくるのではなく、企画を出しておくと反響があつて資料がもらえますね。

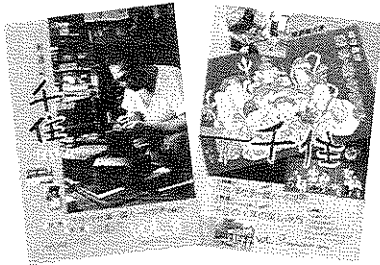
○大野 歴史があり、原住民が多い町です

が、狭い地域なので、ネタが尽きてしまうのではないかと心配をしてくださいます。

また、小さな本なのに、かなり突っ走って書いているものだから、「鶏のようにあちこち突っついてせわしない」と言われました。「これは映画の予告編だと思ってください」と言っています。

企画に対する批判も多いですが、「懐しい」と必ず言われます。

企画は大幅に変わってしまうのが常です。変われば変わるほど、結果的にはおもしろくなると慰めています。文章量や写真の大きさをのっけに決めたりは、絶対しない。そういう意味での素人っぽさはずっと大事にしたいと思います。



■体裁と工夫

○森 調べたこと、知ったことを何でも詰め込みたいと思うせいか、どの雑誌も文字が小さいような気がします。版下づくりや活字の問題、デザインの問題などは、どのようににされていますか。

○野口 体裁はコンパクトであること。そして、独自性と読みやすさですね。

『こんにちは小金井』はA五判でしたが、『武蔵野から』はB五判変形です。この紙のとり方は、プロの編集者が「これは？」というほど特別な折り方になっています。この細長い形はお店に置いてもらうことを考えてのものです。

活字は最近少し大きくしています。デザインの的なものは、一応形を決めたら、そのフォーマットは当分かえずに、流し込んでいきます。

私たちの周りには、プロの編集者やデザイナーがいて、よくいっしょに仕事をします。本職の人たちは、私たちのアマチュアリズムのよさを、新鮮に思うようですし、私たちが、行き詰まったときには、手を貸してくれます。

シャッフルするというか、混ぜ合わせることでできるのは、地域ならではです。地域に住んでいるからこそ、こんなことができるのです。

○立壁 私のところは、レイアウトはグラフィックデザイナーがやっていますし、編集者、ライター、イラストレーターなどのプロが参加してくれています。ただ、編集のセオリーも知らない私が編集人だったり、編集者の友人がイラストMAPを描いたり、プロがアマチュアリズムでやっているという感じもあります。

文字は、年配の読者が多いのに確かに小さいですね。文字が多すぎて疲れるよと言われることもあります。私が書きすぎるからですが、投稿欄の文字は最近少し大きくなりました。

○森 『千住』もとても素敵でレイアウトなのですが…。

○大野 ありがとうございます。私たちは、普段本を見ない人にも興味を持って見てほしい。二色だけでも、何とかカラフルに見えてほしい。とにかく見開きごとに、目を奪うものを載せたいと思っています。活字も写真も小さいですから、ちよつと疲れながらもしみません。次号はリニョールして、ロゴもかえようとしています。

雑誌づくりというのは初めてで、いつも回り道をしています。一般の雑誌づくりとは全然違うやり方で、逆に、それが特徴となっているのではないかと思います。

■広告と配本

○森 広告はどうやって取っているのか、配本はどうしているのかをお聞きします。

○野口 基本的に雑誌は無料ですから、それだけの広告を集めています。収入は広告費と地域の協賛費です。

私たちは以前に、「武蔵野三婆さんの東京見物」という特集をやりました。武蔵野は、東京とまた一味違う地域ですから、商売をしている方たちも、それなりに何か「やっていかなければいけない」という思いで媒体を支えてくれています。私たちは中身をつくります、商店街はお金を出してくださいという、とても簡単明瞭な仕組みです。

広告はエリアのなかで、自分たちで手分けをして取ります。広告が飛び込んでくることもよくあります。広告も生活のための貴重な情報ですし、取るのではなく、使ってもらえる媒体として体をなしているか、広く、しっかりと読まれているかを考えています。同じ広告主に偏らないようにもしています。広告が埋まらなくて雑誌が出せなかったことはありません。

営業活動はいちばんの取材だと思うので、町のお金の動きは、営業をしているとよく分かります。ライフスタイルの変化や、季節、年中行事を見きわめて、広告も企画で提案すると、取りやすいです。

配本は、「ロビンストア」と呼んでいるのですが、協賛していただく一店一店に自分たちが出向きます。商店主もお金を出すだけではなくて、その本を店に置いてお客さんに渡すわけですから、自分たちも参加している意識を持ってもらうようにしています。作業は車を持っていく助っ人にお願ひしています。

○立壁 私は広告の仕事をしていたのに、広告を取ることがいちばんの苦労になっていきます。出版社などが出してくれても「今回だけのおつきあいです」ということが多いし、始めの頃、ある建設会社にお願ひしたら「お祭り提灯を出すので、予算がありません」と言われました。

そもそも商店会が、地図をメインにした「神楽坂ニュース」という媒体を持っているので、商店はそれに広告を出しています。広告取りではかなり苦戦しています。それにこちらも編集で力つき、時間が迫っていたりすると「記事で埋めてしまえ」ということになったり……。

という次第で、好意的に出してくださいとところに、いつもすがっているという状態です。ときには、ある方のご紹介で大手の印刷会社から年間通していただいたこともありますが、会社が結構あるから、広告は大丈夫という目論見は見事外れました。

そもそも神楽坂はその周辺をいれてもエリアとしてはかなり狭いんです。「ここは牛込、神楽坂」ということで、旧牛込地区の早稲田辺りにも近付きたいのですが、まだ神楽坂だけで手一杯という状態です。配本は、神楽坂は本屋さんが多いので本屋さんが中心になってきました。夜のお店は行く時間も限られるし、手が回らないこともあって、最近あまりお願ひしていません。

○森 私たちも夜のお店に三時ぐらに行くと、まだ店主は来てない。七時か八時に行くと、「こんな忙しい時に来ないでちょうだい」ということがありました。

○大野 地元の本屋さん以外に、各商店、お肉屋さんやお風呂屋さんにも置いていただいています。一日に全部配本はできません。子どもたちも手伝ってくれますが、下の子は私が配本する自転車の後ろでしがみついていたりといった状況です。読者の方も、「本屋さんで二週間前に見たから、そろそろ届くだろう」と、最前のお風呂屋さんに買いに来てくださる。というようなこともあります。

広告は取っていません。会員制です。会費をいただいて、二〇〇円で頒布しています。立ち上がりには、足立区のまちづくり

会社のトラスト基金から助成をいただきました。企業は少ないのですが、法人会員という形も取りました。お店はお付合いで広告をあらゆるところに出しますから、さらにも言いにくい。お店に雑誌を置いていただくときは、逆にこちらが手数料を払っています。その辺のことをどうするかも今後の課題です。

■仲間のパワーとメカニズム

○森 壁にぶち当たってやめようと思ったことはありませんか。

○野口 最初のころ、やめたいと思ったことはあります。今は私自身が達者になってしまったのか、そんなに動かなくともよくなったのか、ほかの人が新鮮に動いてくれます。うまく数珠つなぎになっています。家庭の事情がたいへんだつたりすると、誰かが順繰りでカバーします。スタッフはそれぞれの連れ合いよりも長い時間いっしょにいますので、阿吽の呼吸です。

○森 いろいろな事業で、「女の人間士がずっといっしょにやっていてよく喧嘩をしませんね」とか言われることがあるのですが、そういうのはないのですか。

○野口 我慢しないで、ガンガン言い合っ

ています。ああ、また始まったみたいなきらじで、言いたいことは言っています。お互いに、その辺は分かるようです。新しく来た人は、こういう仕事の仕方もあるのかとびっくりしながらも、ついてきてくれます。

○大野 私はずっと千住育ちで、相棒は大阪育ちです。俗にいう東京文化と大阪文化のすごい差がありますね。私の主人が大阪の出身ですから、大阪人の考え方や言葉の使い方、解釈の仕方は、かなり身にしみて感じてたのですが、やはり火花が散りまです。難しいです。ただ、そうやって火花散らしたことがいい結果を生めば、それですよと思っています。

○森 子育てと地域雑誌の両立で、プラス面、マイナスの面がありますか。

○大野 プラス面は、子どもの目を通して町を見ることができることですね。

○立壁 デザイナーの女性は子育てを卒業しましたし、私はシングルで、もう年ですが、親が元気なのでやっていられます。

参加してくれている仲間にはつきりものを言うので意思の疎通はしやすいし、何よパワーがあるので助けられています。

■地域雑誌は成長する

○森 雑誌はつくっている人とともに成長していくものだと思うのです。私たちは子どもを産んで育てると言う時期に、ずっと雑誌をやってきました。三人で始めた時は、子どもは四人でしたが、今は一〇人です。

最初のころは、公園が気になったり、保育園の活動に参加をしたりしました。次には、学校が気になり、育成室の活動に参加をしました。現在はそろそろ子育てを卒業して、高齢者の介護とか、地域で町で老いる自分たちのことを考え始めているのです。町と付き合っていくということについて、例えば、町会、商店街、既存のいろいろな団体があつて、さまざまなタイプの人がいるところで、今までどうやって付き合っていたのでしたのか。



○野口 雑誌は商店街に置いてあるの、商店街との密度は濃いですね。雑誌づくりを始めたころは、コピーもフアクシミリもありませんから、駅前の文房具屋さんに行って、企画書や挨拶文のコピーを取っていました。あまりよく行くので、「何をやっているの」と言われて説明をする。と、そのおじさんが、「じゃ、この商店街は僕がまとめてあげよう」と、いっしょについて歩いてくださったのです。そういう形で助けてもらいました。その文房具屋さんも、再開発がらみでなくなりました。

町をいつも、同じ軸で見てきたのは、地域雑誌かもしれない。これはきつと宝になるという気がしています。町の情報が行政とは違って、地域にいる全日制市民、すなわち、生活者の面で、堆積していったという経緯は今まであまりありません。全日制市民に対するのが、中央に勤めに行っている人たちで、定時制市民です。

○森 町づくりは町のニーズをつかまなければなりません、地域雑誌はそのニーズを発信することができるでしょうか。

○野口 さきほど言いました「グリーンネットワークス構想」を、都市計画や建築系の人といっしょに立ち上げました。それぞれの駅のデザインを、陳情ではなく、自分たち

も参加して発言していこうというものです。沿線六市の市長たちも動かして、町ぐるみで取り組んでいます。雑誌づくりからスタートして、今はまちづくりに発言しているのもまたおもしろいと思っています。

さまざまな人が新しいことを考えますが、その町がどうだったのかというのは、割と知らないです。去年、五年前、一〇年前はどうだったかという資料を、私たちが残している。このことは、ひそやかな楽しみというところでしょうか。

■町・商店街・行政との関係

○森 町、商店街、行政との関係はどうですか。

○大野 行政との結び付きは古く、私たちのことはよく理解してもらっています。会員に区の職員も多いのです。逆に地元町会や商店街には認知度は低いです。

知っているけれども知らないよという独特の言い方がありますが、そういう意味では、まだ黙って見られている段階かとも思えます。

今年四年目になります、強い視線を感じ始めています。これは思ったよりも早く、こちらを向いてくれました。どういう形で協力しあえるだろうかとか考え始めていくところですよ。

○立壁 行政とは、まちづくりの会を通してつながりがあります。まちとの関係と言えば、創刊号を出すとき、「浴衣を持っていくけれど着ていくところがいい」という声があつたので、「神楽坂に浴衣でいらつしやいと」と呼びかけてはどうかと、二つの商店会にもちかけたところ、一方は「浴衣姿の女性にプレゼントをしよう」、もう一方は「浴衣着こなしコンテストをする」と、すぐ受けてくれました。ディスプレイにも持ちかけたら「夏祭りの一日、浴衣の女性は無料にします」と即座に受けてくれて。以来、夏祭りのときは、商店会が「浴衣でおいでよ、神楽坂」という浴衣歓迎キャンペーンをいろんな趣向で行っています。

この夏、二つの商店会の協力のもと、さきほど申しました「まちに飛びだした美術館」の催しをやったときは、役員さんが道路使用許可の手続きをしてくれたり、「こういう催しがあるが、予算もないよ。バケツや水を提供したり、店の前を清掃して協力を」とお店に回覧を回して、ペーパー敷きも率先してやってくれました。

ところで、いま、私たちは『神楽坂宴会ガイド』という別冊を編纂しています。これはお店に関する問い合わせが多いので、それに応えるためにやってみたのですが、お店の活性化と、私たちの雑誌や活動資金調達につながればと思っています。

■子育てと地域雑誌

○八田 大野さんは、「子育てをしながら雑誌を出すということは、子どもの目で見ることができるようになった」とおっしゃいました。

具体的に、雑誌の上でどういう反映されたのでしょうか。

○大野 子どもの目だけでなく、世代によって町の見え方が違います。また、記憶した時代によって見え方も違います。人の記憶というものは、大体小学校低学年ぐらいのときに住んでいた町の影響を強く受けます。子どものころに吸収したものが、後の自分を形成します。

いま小学校五年生の娘は、立ち上がり当時からスタツフのつもりになっています。さきほども言いましたが、配本時に同行したり、カットを描いてくれたりします。子どもながらに、いろいろなアドバイスをくれます。

最近、郷土のことを知りたいと地元の小学校何校かの訪問がありました。こういう本を自分もつくってみたい、記事の書き方を教えてください、ということがありました。その子も豆記者として、来年辺りデビューするのではないでしょうか。連続と続いていくことは、ほんとうにうれしいことです。

■「町に飛びだした美術館」

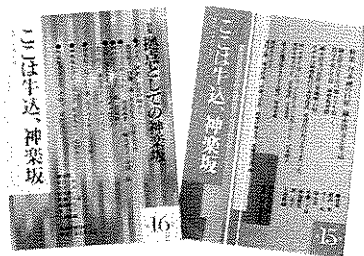
○八田 「町に飛びだした美術館」は、立壁さんが仕掛けられたのですか。

○立壁 きつかけは「鏑木清方と神楽坂」という特集でした。神楽坂は、尾崎紅葉や泉鏡花、夏目漱石など、文学者だけでなく、川合玉堂、鏑木清方、梶田半古というような画家がいて、こういう人の画塾に後の大家たちが集まっていたんです。

それで改めて町を見渡したら、ギャラリーがいくつもあって、いろいろな人が集まってくる。それで、「アートの町、神楽坂」をアピールしようと、ギャラリーが一斉に神楽坂をテーマに展覧会をすることになったのですが、ならばお店にも絵を飾ってもらおう、戸外でも何かやろうということ、坂で絵を描く催しをやることになったのです。それで、ペーパーを敷くときはこの音楽を流そう、お揃いのマーク入りのTシャツを着よう、たれ幕も作ってなど、どんどん盛り上がっていったんです。

経費は、ポスターやちらしの制作費、新聞の折り込み代、画材やガムテープも大量に用意したので、結構かかりました。商店会に援助してもらったり、個人的に出しあったり、カンパをお願いしたりしましたが、それでも足りず、手伝ってくれた若い人たちもすべてボランティアでした。

あるプランナーに、普通なら一〇〇万円単位の催しだと言われましたが、それを手弁当で何とかやってしまったわけです。ある新聞の記者さんに、内情を話したら、そういう催しだからいいんですよ、と言ってくれました。



■町の抱える問題とつきあう

○中村 私は世田谷区のまちづくりファンドの助成金で、まちづくり活動から地域新聞発行へ行き着いたのです。町というところ、そこに生々しい活動があつて、例えば、森さんのところだと、いろいろな保存運動とか、地下の駐車場の話とか、野口さんのところだと、国立の景観の問題などがあると思います。そのようななかで、地域雑誌が持っている町のなかでのスタンスをどうのように考えられているのでしょうか。

○野口 地域雑誌のもっとも大切な、そしてすべての人に共通していることは、そこで暮らしているということ。ですから、相反することには、どちらにもつかないことにしています。そうしますと、どちらからも重宝されず、運動そのものには深入りしないというか、深入りできない。みんな立場が違いますので、どちらにも立てないと思うのです。

しかし、例えば、ある景観保存が暮らしているみんなの最大公約数となったら、大きく発言します。しゃしゃり出て、「ここは武蔵野ですから」とか、そういう蘊蓄を述べたいと思います。

○立壁 神楽坂の坂の途中に、一二階ものマンションが建つというときには、まちづくりの会の一員として、説明会に出て要望を出すところまで参加しました。でも、直接利害関係のある周辺の人たちが協議会を結成して交渉することになったんですが、あるお店が単独で、塀に卒塔婆をずらり立てたり過激な反対運動を展開して、マスコミ種になった。これには賛否両論があったのですが、こちらはもっと神楽坂らしい反対運動を思っていたので、雑誌に書いたりましたが、結局、一階低くするというだけでマンションは建ってしまいました。神楽坂はヒューマンスケールの町で、戦

災に遭っても昔の地割りや道が残っている。それが神楽坂のよさなので大規模開発はいらないといっていることが、いま私たちにできることだと思っています。

○森 私たちは民事には介入しません。例えば、不忍池という公共空間の地下に、駐車場をつくることや上野駅の建替問題についてどう考えたらいいか。まず、みんなの意見を雑誌に載せて、問題を知らせることを基本にします。

保存については、住民同士の利害が一致しないというは少ないので、運動をすることもありません。雑誌は直接それを全部担いませんが、発生する問題は必ず載せます。最近、寺町の真ん中に、きれいな景観の、しかも周りが全部お寺で空の広い所に、突然九階建てのマンションが建つことになりました。町の人たちは集会を持って、マンションメーカーの社長も出席してもらって討論をし、デザインを変更させて、六階建てにしました。建築協定もできました。それを全部雑誌に載せました。

○山崎 私は、森さんたちといっしょに、『谷根千』を一五年やっていて、最近は、休みの日は町にいたくないという気分です。何年もやっているか、ここがいやだというのが出てきませんか。

○野口 私の場合はエリアが広いのと、奥多摩に常宿を持っていて、行く先々に何かしらポイントがあります。それで、ここがいやなときにはあつちに行くといういろいろな形が取れるので、窮屈さはありません。

○立壁 私たちはエリアが狭いし、昔からいるので外を歩いたら挨拶のし通しになります。

○大野 私自身は千住には住みにくいタイプだったので、縁があって居続けるかには、この町を好きになりたい。見方を変えて、見え方が変わって、アニメで紹介したような、「あつ、これなんだね」というようになりました。

■図書館とインターネット

○小澤 私が勤務します小平市中央図書館では、町がどういうふうに変わっていくかを、一年おきぐらいに定点撮影をやってデータベース化をしています。

図書館が地域雑誌づくりで役立つのかどうかは気になっています。

また、地域雑誌をインターネット上で宣伝をして、そこで一覧ができて、注文もできたら、ということを考えていますが、どうでしょう。

○野口 私たちは図書館をとでも重宝して使っています。多くの資料が買えませんが、各自、近くの図書館に行きます。それと、配本中の休憩所として使っています。図書館は編集室と同じぐらいのウエートで各自が利用しています。

『こんにちは小金井』が、私たちの編集室に全部揃ってないときに、小金井市の中央図書館資料室を案内したこともあり、この資料室では、バックナンバーの予算、一〇〇円を計上してくださっています。

私たちは都立多摩図書館に一括して配本をしています。そこから、各市の図書館や分館に配本するシステムを使わせていただいています。当初、広告がたくさん入っているのですが、行政を使って配本するのはまかりならんとすごい悶着があったのですが、しつこく食い下がりました。最初駄目と言われても、その理由が腑に落ちないときにはねばって、状況を耕します。

○立壁 私は一人で調べ物をしているのが好きなので、図書館に行つて息をつくことはありますし、発見の宝庫という感じで利用しています。インターネットはやっていますが、ホームページは忙しくてまだやっていません。以前はNTTが、ちまたネットというのを始めて、タウン誌の記事を載せてくれていましたが、タウン誌フェステ

イバル共々中止になりましたね。いまは過渡期のようなですが、この世界にもインターネット時代は必ず来ると思います。

○大野 近々、千住にも大きな図書館ができてますので、かわるかもしれません。千住のことを調べたいと図書館に行つても、資料がないというのが雑誌づくりの動機の一つでした。千住の本は出ているのですが、図書館がありません。千住のことを気楽に読める本がほしかったのです。

区の都市環境部の方が、ホームページで『町雑誌 千住』を紹介してくださっています。「蔵」に関するホームページもありますが、アクセス数は少ないようです。活用を考えたいと思っています。

○森 図書館にお願いしたいことは、商店街のチラシとか、町会名簿、マンション広告など、消えゆくメディアを集めること。東京の普通の町の記録や資料を収集してほしい。例えば、「エンサイクロペディア千住」という類のものができるといいと思っています。神戸の震災のあと、その町の被害状況、ボランティアの残した記録など、何でも集め、記憶していこうという活動も進められています。

私たちはまだインターネットをうまく使えていませんが、時間と手間暇をかけて雑

誌を出していくという紙のメディアが、これから残っていくのかどうか。メディア面から地域雑誌を考える岐路というか、ターニングポイントにあるのではないかと思っています。

名残りの尽きないところですが、このフォーラムを、みなさまに楽しんでいただけたのではないかと思います。また、いつかこの続きをやってみたいですね。今日はどうもありがとうございました。



■江戸東京フォーラム話題一覧

() 内の所属は話題提供時のもの

1986年7月～12月

- 第1回 江戸東京フォーラム委員会の進め方と話題提供……小木 新造 (歴史民俗博物館)
 第2回 都市下層社会の形成と変容……内田 雄造 (東洋大学工学部)
 第3回 やわらかい都市構造……陣内 秀信 (法政大学工学部)
 第4回 考現学の考古学……佐藤 健二 (法政大社会学部)
 第5回 明治期の道路 (街区)・路地の幅員基準について……石田 頼房 (都立大都市センタ)

1987年1月～12月

- 第6回 博覧会と盛り場の明治……吉見 俊哉 (東京大学文学部)
 第7回 明治期の繁華街の建築……初田 亨 (工学院大学)
 第8回 東京の土地・住宅史……長谷川徳之輔 (建設経済研究所)
 第9回 江戸の構成と構造……加藤 貴 (北区教育委員会)
 第10回 水の都・深川成立史……吉原 健一郎 (成城大文芸学部)
 第11回 江戸の建築技術……西 和夫 (神奈川大工学部)
 第12回 松浦武四郎の一畳敷の書斎……ヘリー スミス (国際基督教大学)
 第13回 徳川の旧家臣のみた、江戸・東京……井上 勲 (学習院大文学部)
 第14回 路上から見た江戸・東京……藤森 照信 (東京大学生産研)
 第15回 東京書物探索入門……大串 夏身 (都立中央図書館)
 第16回 神田のサウンド・スケープの研究……鳥越 けい子 (法政大学)

1988年1月～12月

- 第17回 絵画史料にみる江戸の町……波多野 純 (日本工業大工学部)
 第18回 明治期東京の飲料水販売……松平 康夫 (東京都公文書館)
 第19回 江戸城御殿の室内空間について
 ー障壁画下絵による復原ー……西 和夫 (神奈川大工学部)
 第20回 小江戸・川越のまちとすまい……内田 雄造 (東洋大学工学部)
 第21回 現代東京の祝祭……松平 誠 (立教大学)
 第22回 丸の内の変遷とそこに働くサラリーマンの職と住……岡本 哲志 (岡本都市建築研)
 第23回 浅草寺の境内・門前世界……竹内 誠 (東京学芸大学)
 第24回 都心定住を考えるー市街地の「町」の現代的意味ー……奥田 道大 (立教大社会学部)
 第25回 都市社会調査の歴史から……佐藤 健二 (法政大社会学部)
 第26回 世界都市東京の光と影……町村 敬志 (筑波大社会科学)

1989年1月～12月

- 第27回 都市の語り出す物語……宮田 登 (筑波大歴史人類)
 第28回 江戸の都市計画ー江戸前島を中心としてー……鈴木 理生 (区立京橋図書館)
 第29回 江戸の武家屋敷について……北原 糸子
 第30回 江戸の被差別・東京の被差別
 ーもうひとつの江戸・東京ー……大串 夏身 (都立中央図書館)
 第31回 江戸東京の遊びーかるたを中心にー……村井 省三 (村井かるた館)
 第32回 森 鷗外の都市論……石田 頼房 (都立大都市センタ)
 第33回 東京都心部における空間利用形態……山下 宗利 (筑波大地球科学)
 第34回 「響き」としての東京の街なみー神田地区における
 建物の形態が道の音環境に及ぼす影響を中心にー……鳥越 けい子 (サウンド・スケープ・デザイン)
 第35回 東京の都市構造の変容とアジア系外国人問題……奥田 道大 (立教大社会学部)

1990年1月～12月

- 第36回 鶴屋南北の幽霊……………横山 泰子 (国際基督教大学)
 第37回 東京と近代詩……………行吉 正一 (江戸東京博物館)
 第38回 同潤会うぐいす谷アパートの建て替えをめぐる
 —マンションの老朽化と建て替え問題—……………内田 雄造 (東洋大学工学部)
 第39回 東京の地価……………前田 尚美 (東洋大学工学部)
 第40回 江戸の地価……………伊藤 好一 (関東近代史研究家)
 第41回 江戸のごみ処理……………伊藤 好一 (関東近代史研究家)
 第42回 都市農業と土地問題……………石田 頼房 (都立大都市センター)
 第43回 天皇巡幸と「帝都」としての東京……………吉見 俊哉 (東大新聞研究所)
 第44回 江戸の名所・王子……………加藤 貴 (北区教育委員会)
 第45回 上水からみた江戸の都市計画……………波多野 純 (日本工業大工学部)
 第46回 江戸名所絵における遠近法……………ヘンリー スミス (コロンビア大学)

1991年1月～12月

- 第47回 江戸図屏風にあらわれた風俗……………丸山 伸彦 (歴史民俗博物館)
 第48回 鋏形恵齋の江戸一目図屏風……………小澤 弘 (調布学園女子短大)
 第49回 見立絵というもの……………鈴木 重三
 第50回 江戸住宅事情……………片倉 比佐子 (東京都公文書館)
 第51回 江戸・明治・大正のすまい……………平井 聖 (昭和女子大学)
 第52回 最近の自治体住宅政策について……………林 泰義 (計画技術研究所)
 第53回 東京市営住宅事業について……………内田 青蔵 (東工大附属高校)
 第54回 東京における水際土地利用の変容
 —日本橋川と隅田川を中心として—……………岡本 哲志 (岡本都市建築研)
 第55回 江戸から東京への景観構造変化……………窪田 陽一 (埼玉大学工学部)
 第56回 東京都の都市計画と河川運河……………昌子 住江 (関東学院大学)
 第57回 アジアのスラムと居住へのたたかい……………内田 雄造 (東洋大学工学部)

1992年1月～12月

- 第58回 新宿ヤミ市の復原……………松平 誠 (立教大学)
 第59回 鋏形恵齋筆の「黒髪山縁起絵巻」と「江都名所図会」を
 めぐる……………小澤 弘 (調布学園女子短大)
 第60回 芝居町と観客—都市文化の底流をさぐる—……………小木 新造 (江戸東京歴史財団)
 第61回 「よ組」を中心とした江戸火消しの活動……………鈴木 栄一 (千代田区議員)
 第62回 近代演劇人による伝統の発見……………横山 泰子 (国際基督教大学)
 第63回 博覧都市江戸東京……………吉見 俊哉 (東大新聞研究所)
 第64回 読売から新聞まで……………GERALD GROEMER
 第65回 音の風景と近代の忘れもの—大分県竹田市
 瀧廉太郎庭園整備計画をめぐる—……………鳥越 けい子 (サウトースクープ機構)
 第66回 三越百貨店が演出した文化生活……………初田 亨 (工学院大工学部)
 第67回 ヴェネツィアの経済空間—交易・市場・職人—……………陣内 秀信 (法政大学工学部)
 第68回 都市のまつり……………宮田 登 (筑波大歴史人類)

1993年1月～12月

- 第69回 江戸、初期の土地問題……………吉原 健一郎 (成城大文芸学部)
 第70回 江戸勤番武士の生活……………竹内 誠 (東京学芸大学)
 第71回 江戸のおんな……………杉浦 日向子 (江戸風俗研究家)
 第72回 大名屋敷跡地の住宅地開発—麻布霞町の場合—……………加藤 仁美 (跡見学園短大)
 第73回 新説・日本近代住宅史……………藤森 照信 (東京大学生研)
 第74回 幻の東京オリンピックと万博……………磯村 英一 (東京都立大学)
 第75回 東京市社会局と都市社会調査……………佐藤 健二 (法政大社会学部)
 第76回 近代における東京の都市庶民住居の発展……………江面 嗣人 (文化庁文化財)
 第77回 江戸の町と京都の町……………小川 保 (清水建設構技研)
 第78回 「まち」の死に立ち会うとき—汐入をめぐる—……………伊藤 毅 (東大工学部建築)
 第79回 谷中墓地をめぐる……………森 まゆみ (谷根千工房)

1994年1月～12月

第80回	首都の葬送空間－江戸・東京の火葬場と墓地－	八木澤 壮一	(東京電機大学)
第81回	葬式のフォークロア	宮田 登	(筑波大歴史人類)
第82回	東京一極集中と今後の課題 －より豊かな都市空間をめざして－	東郷 尚武	(東京市政調査会)
第83回	東京都政の50年	大串 夏身	(昭和女子大短大)
第84回	博物館の住宅展示を考へて －人々は生活史をどうみるか－	ジョナサン サト	
第85回	都市空間とセクシュアリティ	上野 千鶴子	(東京大学文学部)
第86回	メディアとしての絵はがき	佐藤 健二	(法政大社会学部)
第87回	メキシコシティと東京の間で	吉見 俊哉	(東大社会情報研)
第88回	北京と東京の比較都市論 －歴史的空間構造と近代化のメカニズム－	陣内 秀信	(法政大学工学部)
第89回	川越のまちなみの復元	内田 雄造	(東洋大学工学部)
		浅井 賢治	(東洋大学工学部)
第90回	河鍋曉斎と江戸東京	小木 新造	(江戸東京歴史財団)

1995年1月～12月

第91回	都市と美術館と絵画－パリ・ロンドンと日本－	小澤 弘	(調布学園女子短大)
第92回	野村コレクション「小袖屏風」とその周辺	丸山 伸彦	(歴史民俗博物館)
第93回	終戦直後の東京の生活をさぐる資料	天野 隆子	
第94回	歌謡曲のなかの東京	大串 夏身	(昭和女子大短大)
第95回	江戸の着物文化	田中 優子	(法大第一教養部)
第96回	江戸東京学への招待試論	小木 新造	(江戸東京博物館)
第97回	「境内」からみた三都－三都の比較都市史序説－	伊藤 毅	(東京大学工学部)
第98回	盛り場考	神崎 宣武	
第99回	近世都市空間の創出過程について －都市構築の基盤材調達の視点から－	北原 糸子	
第100回	江戸東京学への招待 －生活の舞台としての都市空間－	小澤 新造	(江戸東京博物館)
		陣内 秀信	(法政大学工学部)
		高階 秀爾	(国立西洋博物館)
		田中 優子	(法大第一教養部)
	司会:内田 雄造		(東洋大学工学部)
第101回	都市の民俗学－色・音・匂の変化－	小林 忠雄	(歴史民俗博物館)

1996年1月～12月

第102回	同潤会柳島アパートの生活	大月 敏雄	(東京大学工学部)
第103回	同潤会による復興まちづくりと普通住宅建設に ついて	佐藤 滋	(早大理工学部)
第104回	住文化の体験の場としての博物館	小澤 紀美子	(東京学芸大学)
第105回	縁切寺－東慶寺と満徳寺－	高木 侃	(関東短期大学)
第106回	考古学からみた江戸と他都市との比較	小林 克	(江戸東京博物館)
第107回	日本パノラマ館と凌雲閣－浅草の2つの巨大建築は、 当時の人々にどのような印象を残したか－	平井 聖	(昭和女子大学)
第108回	震災復興<大銀座>の街並みから	石川 幸恵	(清水建設総務部)
第109回	明治初年の大火と貧富分離論	石田 頼房	(工学院大学)
第110回	震災復興計画の理念とその遺産－東京、仙台、 名古屋、神戸、広島等をめぐって－	越沢 明	(長岡造形大学)
第111回	関東大震災後の東京の住宅地形成について	藤岡 洋保	(東京工業大学)
第112回	カフェーと喫茶店	初田 亨	(工学院大学)

1997年1月～12月

- 第113回 橋のアーバン・デザイン……………伊 東 孝 (日本大学)
- 第114回 城下町大坂、江戸の都市設計……………篠 原 修 (東京大学工学部)
- 第115回 東京都都市景観マスタープラン
—新たな景観まちづくりへの展開—……………布 施 六 郎 (東京都)
- 第116回 江戸・東京の湯屋……………松 平 誠 (女子栄養大学)
- 第117回 江戸城から宮城へ
—皇居を中心とする都市空間の変容—……………米 田 雅 子
- 第118回 江戸藩邸物語……………加 藤 貴
- 第119回 建築家、佐藤功一と都市への視線……………米 山 勇 (江戸東京博物館)
- 第120回 明治の歌謡にみる東京……………大 串 夏 身 (昭和女子大短大)
- 第121回 「江戸名所図会」と長谷川雪旦……………鈴 木 章 生 (江戸東京博物館)
- 第122回 町奉行所・定火消屋敷・聖堂・上水
—絵図・図面にみる江戸の都市施設—……………波 多 野 純 (日本工業大学)
- 第123回 参勤交代—巨大都市江戸のなりたち—……………原 史 彦 (江戸東京博物館)

1998年1月～12月

- 第124回 寛永13年江戸城外堀普請と周辺地域の変化……………棚 木 真 (新宿歴史博物館)
- 第125回 関東・東国の部落史
—部落史の「見直し」論議に引きつけて—……………藤 沢 靖 介 (部落解放研究所)
- 第126回 明治期の被差別部落
—都市東京と植民地主義の言説編制から—……………友 常 勉 (部落解放研究所)
- 第127回 関東大震災と朝鮮人虐殺事件……………石 田 貞 (埼玉同和教育協)
- 第128回 原宿の空間構造—人気の秘密を歴史から読む—……………柳 瀬 有 志 (法政大学工学部)
- 第129回 横浜市の市営住宅事業について……………水 沼 淑 子 (関東学院女子短大)
- 第130回 目白文化村とその変貌……………八 木 澤 壮 一 (東京電機大学)
- 第131回 住総研創立50年記念公開フォーラム……………小 木 新 造 (江戸東京博物館)
- 地域学の明日を考える
……………橋 爪 紳 也 (京都精華大学)
- ……………結 城 登 美 雄 (まちづくりプランナー)
- ……………森 まゆみ (作家)
- 司会:陣 内 秀 信 (法政大学工学部)

1999年1月～11月

- 第133回 東京・明治大正の人口問題……………小 木 新 造 (江戸東京博物館)
- 第134回 江戸東京フォーラムと住総研……………大 坪 昭
- 墨壺 (伝統的な) の履歴書……………吉 田 良 太
- 第135回 「ふるさと」としての東京深川—ある個人的な感想—……………川 田 順 造 (広島市立大学)
- 第136回 都市と農村の蜜月時代
—近郊農業の展開と流通の変化—……………江 波 戸 昭 (明治大学商学部)
- 第137回 永井荷風と東京……………湯 川 説 子 (江戸東京博物館)
- 第138回 公開市民フォーラム……………立 壁 正 子 (「ここは牛込、神楽坂」)
- 地域雑誌からみた町……………野 口 由 紀 子 (「武蔵野から」)
- ……………大 野 順 子 (「まち雑誌 千住」)
- 司会:森 まゆみ (「谷中・根津・千駄木」)

江戸東京フォーラムについて

江戸東京フォーラムは1986年5月に住宅総合研究財団の助成研究として発足し、7月に第1回フォーラムを開催しました。翌年度から、財団委員会活動として、現在に至っています。

小木新造（江戸東京博物館顧問）を委員長として、委員は内田雄造（東洋大学工学部教授）、陣内秀信（法政大学工学部教授）でスタートしました。参加メンバーは建築史・都市計画・歴史学・民俗学・社会学等の研究者等です。

目的は、都市機能が雑然と混ざりあって、極めて輻輳した多重構造都市・東京を、江戸から今日までの都市形成の発展と、文化変容の過程を一貫した視座から学際的にアプローチすることです。

具体的に、次のような活動をしました。第1は、文化発信都市「江戸東京」を浮世絵や屏風絵の史料から多角的にアプローチし、祝祭、娯楽、風俗、モードやメディアにあらわれる都市の文化的様相を読み解いたことです。第2は、江戸開府と共に始まった都市計画は柔軟で固有な都市を形成してきました。その歴史的連続性と都市の経験を問い直し、生活空間としての都市のコスモロジーとアメニティを考えました。第3は、江戸東京に住まう人々は、いかにコミュニティを形づくってきたか。生活の場としての住居、境界での人づきあい、土や緑や音の風

景と環境の移り変わりを見つめ、大都市のまちづくりのこれまでとこれからを再考しました。

成果は、住宅総合研究財団の助成研究として、「住総研研究年報」14号（1988年）に、財団の委員会活動として「住総研研究年報」18～24号（1992～1998年）に報告をしました。また、当財団機関誌「すまいろん」の住総研 NEWS LETTER のページでも報告しています。

第60回には「江戸東京を読む」を記念出版し（筑摩書房、1991年）、あわせて、記念フォーラムを開催しました。第100回にも「江戸東京学への招待」と題して、文化誌篇、都市誌篇、生活誌篇の3分冊を出版し（日本放送出版協会、1995、1995、1996年）、同テーマで記念フォーラムを開催しました。

第131回は、住宅総合研究財団創立50年記念フォーラム「地域学の明日を考える」を公開にして開催しました。

委員も、小木新造、陣内秀信の他に、新たに、波多野純（日本工業大学）、森まゆみ（作家）、横山泰子（法政大学）、吉見俊哉（東京大学社会情報研究所）を迎え、より学際的なメンバーになりました。

これから、江戸東京フォーラムは、地域の歴史的経験から学ぶことも、方向のひとつとしたいと考えております。

「地域雑誌からみた町」

2000年3月31日発行 ◎

編集＝江戸東京フォーラム委員会

発行人＝峰政克義

発行所＝財団法人 住宅総合研究財団

〒156-0055

東京都世田谷区船橋四丁目29番8号

Tel. 03-3484-5381 Fax. 03-3484-5794

E-mail: jusoken@mxj.mesh.ne.jp

URL: <http://www.jusoken.or.jp/>

印刷所＝株式会社 七映

住宅総合研究財団について

当財団は、1948(昭和23)年、当時の窮迫した住宅問題を、住宅の総合研究、および成果の公開・実践・普及によって解決することを目的に、当時の清水建設社長・清水康雄氏の私財の一部を基金として設立された財団法人です。

以来50数年、現在は住宅に関する研究助成事業を中心に、シンポジウムの開催、機関誌「すまいろん」の発行などの活動を続けています。

- ・基本財産 23億5,900万円(1999.3現在)
- ・年間事業費 8億円